

## 「中国の南と北の美術」展によせて

## 中国南方と北方の風土と造形

中国を南方と北方に分ける場合、通常は黄河と長江の間を流れる淮河(淮水)がその境界とされます。

古代より稲作が行われた南方では、長江流域に新石器時代の河姆渡遺跡(浙江省)や良渚遺跡(浙江省)、三星堆遺跡(四川省)が発見されており、玉器や青銅器が製作されました。それに対して、黄河流域を中心とした北方では農耕が行われ、仰韶文化や竜山文化が起り、彩陶や黒陶、灰陶などの土器が発達しています。

内陸と海岸沿いなど場所によっても気候や風土、地形は異なりますが、温暖湿潤な南方に対して、北方では乾燥地帯が広がり、冬の寒さが厳しいという土地の特性は文化の形成と深く関わり、また文学や絵画においても表現されてきました。

漢時代の歌謡「江南」には、水面を覆う蓮葉の下で魚が戯れる様子が謡われています。

江南可採蓮 蓮葉何田田 魚戲蓮葉間  
魚戲蓮葉東 魚戲蓮葉西 魚戲蓮葉南  
魚戲蓮葉北

蓮と魚は男女の隠喩とされますが、水が豊かなのどかな江南の景色を思ふ浮かべることができます。

河や運河を利用して船での往来や運搬が盛んであった江南の情景は「越中真景図冊」(図1 張宏筆 明時代・崇禎12年(1639))に見ることができます。張宏は呉郡(江蘇省蘇州)の人で、本図冊には八図が収められ、越中(浙江省)の名勝を実際に観たうえで描いたことが記されています。図1では、狭まる兩岸の間を手前に向かって進む帆船が縦長の構図に巧みにあらわされ、波立つ水の細かな流れが丁寧に描き込まれています。

「螺鈿金銀平脱山水文硯屏」(図2 明時代)も縦長の構図で、金や銀の薄い板を貼り付けてあらわす漆工の平脱(平文)技法により、水流を舟が進む様子があらわされます。画面左の岸には庵の前の一人の人物が立ち、舟に乗る人物の方を見やっているようです。背面には唐時代の李白が44歳の時の詩「送賀賓客帰越」(『全唐詩』)が記されています。

鏡湖流水漾清波 狂客扁舟逸興多  
山陰道士如相見 応写黃庭換白鶴

この詩は李白が、ともに酒好きで知られる詩人・書家である賀知章が道士となるために故郷の会稽(浙江省紹興市)に帰る際に詠んでいます。清く澄んだ水の流れと詠われる鏡湖(鑑湖)は、

賀知章が玄宗皇帝からその一部を賜り、帰郷して過ごした場所です。硯屏には、金や銀の薄い板や卵殻と見られる素材を用いた細密な表現で、木々の繁りと穏やかな水面があらわされています。舟で帰る賀知章が道士に遭う場面でしょうか。

12世紀前半に北宋が金に華北を追われ、北方を統治下においた金と臨安府(浙江省杭州市)を行宮とした南宋の境界も淮河に沿っています。陶磁器は土地で採れる素材や環境、時代の好みに応じた技術の発達によって製作されます。唐時代には南方の越州窯(浙江省周辺)の青磁と北方の邢窯や定窯(河北省)の白磁が代表としてあげられますが、北宋時代に入ると各地でそれぞれ特徴ある陶磁器が作られるようになります。磁州窯(河北省)は白泥を用いた加飾技法が特に広範囲に影響を及ぼしました。

白搔落牡丹文枕(図3 磁州窯 北宋時代)は陶枕で、白泥を掛けた後に掻き落として牡丹文様があらわされています。素地が鉄分を含んで明るい灰色をしているため、白と灰色で文様があらわされ、清楚な雰囲気を持っています。その後、磁州窯では鉄釉を用いて白と黒色を基調として文様をあらわす黒地白搔き落としや鉄絵の技法が展開されていきます。

北方は黄河流域や山岳地帯、あるいは

は西北の砂漠地帯など、それぞれにおいて地域の特徴を有しています。「城南山水図」(図4 王原祁筆 清時代・康熙29年(1690))は画中の自識に城南(北京周辺)の景勝地が描かれたことが記されています。三月下旬の春の景色であり、厳しい寒さが少し和らいだ頃です。柔らかな筆使いで奥へと広がる山々が描かれています。

本展覧会の最後には館藏品に加えて、京都市立芸術大学の翟建群氏による「黄土地」(図5 紙本墨画 淡彩 133×363cm 2022年 個人蔵)を特別出陳いたします。各地を旅して写生を重ねる作者が描く、黄河上流域にあたる西北地方の風景です。細かな筆を積み重ねることにより、雄大な景色の広がりや眼前に感じられます。

実景をもとにした山水画によっても描かれた目的は様々ですが、それぞれの画面からは景色を見た際の気候や空気の匂いまでも伝わり、そこにはまた、画家の目を通したその土地への思いが込められているように感じられます。

(瀧朝子)

参考文献：松枝茂夫編著『中国名詩選(上)』岩波書店 1983年

## 【村田靖子先生のご逝去を悼んで】

大和文華館学芸部に1973年より30年間勤められた村田靖子先生が2023年12月30日にご逝去されました(享年80)。金銅仏を主とした仏教彫刻を専門とし、精力的に研究を続ける姿勢をいつも教えていただきました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



図1



図2



図3



図4

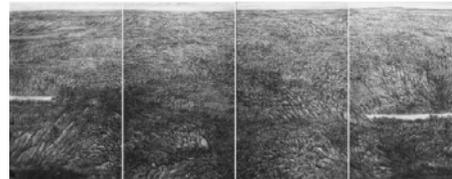


図5

季刊 美のたより No.226

令和6年 4月 5日

発行 大和文華館